

令和元年6月21日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02861

研究課題名(和文) 誤用の事例研究に基づく中国語教育文法の再構築とその有効性の多角的検証

研究課題名(英文) Reconstruction of Chinese language teaching grammar and the multilateral verification of its effectiveness based on the study of Japanese learner's recurring errors

研究代表者

張 軼欧 (Zhang, yiou)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：30559373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究期間において、以下のことに取り組んだ。まず、中国語学習者の学習意欲の変化を調査した結果、学習意欲に影響を与える主な要因は文法事項への理解不足であった。次に、大学における中国語の初学者にとって誤用が発生しやすい文法事項を調査した結果、つまずきの共通のパターンを明確にした。以上の結果に基づき、学習レベルや学習目的に応じて、より平易で学習効果のある教科書を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本申請課題は、教育者だけでなく、初学者もつまずきの心積もりができるので、苦手意識の明確化につながり、学習意欲を「意図的に」維持するための羅針盤になると期待される。研究期間中、教科書は10冊も作り、これらの教科書を使ってもっと良い学習成果が期待できる。また、現時点では中国語学習に限定的な研究成果ではあるが、他言語の学習にも応用可能な点もあると期待している。

研究成果の概要(英文)：During the study period, first of all, by investigating the change of motivation of Chinese learners, it was clarified that the main factor affecting the motivation to learn is the incomprehension of grammatical matters. Next, I made clear the common pattern of the misperception of grammatical items that are prone to misuse for Chinese beginners at university. Based on the above results, according to each learning level and its learning purpose, textbooks that are easier to understand and can be expected to have more learning effects have been made.

研究分野：中国語教育 中国文学

キーワード：中国語教育 学習意識 教室文法 誤用事例 教科書開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

< 近年指摘されている中国語教育における諸問題 >

申請者はこれまで16年間中国語教育に携わっており、複数の大学においてアンケート調査を行った。学習に前向きな動機を持つ学生とそうではない学生はほぼ同数であった(論文実績)。本アンケートを統計学的に分析した結果、教育手法による学生の学習意欲の変化を考慮する必要がある事を見出した(論文実績)。さらに、中国語教育現場で種々の問題を発掘し、それらの問題の解決法を申請者なりの視点で国内学会や国際学会、ならびに学術雑誌で発表してきた(論文実績)。しかし、中国語教育の分野は以下のような潜在的問題点をはらんでおり、「研究の限界点」に達しているのではないだろうかと考えている。

(1) 国内の大学中国語教育は教養科目であるが故に、学習者自身も学習意欲の向上を軽視している場合も多く、教育現場も学習者の姿勢に問題の本質を転嫁しつつある現状である(学習意欲低下の負のスパイラルの主要因)。

(2) 学習者を取り巻く社会環境と学習意識の関連性に関する認識が十分ではなく、啓蒙が必要。

(3) 学習者の学習意欲の向上と文法事項の研究が断片的に行われる流れが強く、横断的・体系的研究が一層少なくなった。

申請者も3点目については以下のように中国語初学者がつまずきやすい文法事項を整理し、さらに言語学的検討を加え、以下のような事例研究を積み重ねてきた。

“怎麼”と“為什麼”が初学者にとって難しい理由の用法論的議論

動詞“次”と“趟”の用法の違い

“t+再+VP”という文型における“再”の用法

助詞“吧”には会話における語気を強める機能がある

“還”と“再”の用法の比較

“得”字補語の使用条件について

大学生の中国語学習の動機づけについて

中国語文法の誤用分析-初級段階を中心に

空缺式“得”字補語の語用的な意味について

これらの事例研究を通じて、申請者は学習者の動機や学習状況を検討し、初学者の中国語学習におけるつまずき方には一定のパターンがあるのではないかと考えるに至った。特に、の結果から、詳細な理論的理解を初学者に求めるよりは、それぞれの語彙や用法を比較する方法が彼らにとって理解しやすいのではないかと考えた。また、類義語のニュアンスの違いをもっと実感できるように、実際使用される状況を撮影した映像教材を利用し、言語感覚の「体験」により納得してもらう方が初学者自身にとって有益なケースもあるのではないかと考えた。しかし、1点目の問題点のように、必ずしも初学者と教育者との間で問題点が共有されるわけではない。

2. 研究の目的

学生(特に初学者)の中国語の学習意欲を高め、学習効果を得るためには、初学者の学習意欲の変動のメカニズムを把握しておくことが鍵である。そのため、誤用例が発生する要因や教室以外でも使用可能な教材の効果を定量的に評価する手法を開発する。そこで、具体的な達成目標を以下のように設定した。

(1) 事例研究の拡充により、学習におけるつまずきのパターンを推定する。アンケートから得た、初学者がつまずく文法事項の事例研究を進め、それらを統合して、共通するパターン(つまずく時の思考)を見出す。

(2) つまずいた初学者の学習意欲の変動過程を解明する。初学者が文法事項の理解につまずく時、どのように学習意欲が変化するかの詳細なデータを取得し、つまずいてからの学習態度や意欲、学習成果の変動を明らかにする。加えて、変動過程に対する各個人特有のつまずきの要因を抽出し、考察する。

(3) 言語感覚を文化背景として獲得するための映像教材の作成と応用。教科書からの抜粋やつまずきの原因となる構文、語彙を中心に、言語感覚の育成に必要な情報を作成する。これらを含む映像教材を作成し、授業で利用して効用を評価する。授業で用いる教科書以外の学習を「背景学習」と称し、学習者が指導者のいない背景学習において効果的に言語感覚などを獲得できる映像教材に質的向上を目指す。

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義
学習過程でのつまずきによる学習意欲や学習成果をアンケート形式(申告型・質問型)により数値化する。学習意欲や成果の変動メカニズムが明らかになれば、日本における中国語教育の実践的な有用性を明らかにでき、非常に特色のある研究になるものと思われる。その中で予想さ

れる「苦手意識」に、代表的・実際的な文章を含む対話を撮影した教材（映像教材）がどのような作用を及ぼすかを明らかにしようとする視点は、授業プログラムをデザインする際に実用的な指針を与えると考えている。映像教材の作成のメリットとしては、以下のように考えている。

・学習において「体験」に優るものは無い。そのための映像である。

・学生がよく間違える類義語に関しては、実際の発話背景を見て、そのイントネーションなどをより一層深く「体験」できる。

・学生にとって理解しにくい文法ポイントや構文の説明方法や習得順序などの定式化とその映像化は、教員が授業で使用しようという動機にもつながる。さらに、背景学習の実質化を実現する事により、教員の負担を減らし、その学習効果の向上も期待できる。

このようなメリットもあるため、言語感覚の効果的な獲得を目的として背景学習を位置づけたい。学習者の日常的な経験を上手に背景学習に取り込める素材を選択し、体系化できると考えている。その一つの取り組みとして、以前より中国の古典白話小説や現代事情に関して研究を進めている。たとえば、小説の登場人物の会話・性格・行動の分析に基づき、当時の恋愛事のやりとりを再現した(中国書店(2007))。現代の結婚・離婚事情に基づき、女性の恋愛・結婚感覚の変化を議論した(中国文芸研究会『野草』82, 96-115(2008))。また、スポーツ比較文化論の立場から、現代の中国のスポーツ行政における女性の立場を論じてきた(女性史学, 16, 44-52(2007))。これらの研究は言語感覚の効果的な獲得に必須な要素を含んだ話題として、背景学習として学生の興味を得やすく、既存のものとは異なる視点の教材を製作するための武器になりえるだろう。さらに、中国語特有の言葉遣いと感情の関係(本音と建前)を明確にすることができると考えている。

3. 研究の方法

多角的な検討作業を効果的に進めるため、以下のように3つのカテゴリーに分類し、図1に示す流れで研究を進める。後で詳述するように、研究の流れは、図1中のOutput 1, 2とOutcomesの質的向上を図るためのPDCA(Plan・Do・Check・Action)サイクルになっている。

【平成28年度】

第一類:申請者の既往の研究を中心に、誤用例の間に言語学的共通性が見られるかを検討する。また授業を通じて誤用例を発掘し、これまでの研究(たとえば論文実績、など多数)と同様に言語学的アプローチにより事例研究を進める(Output1の準備)。

第二類:申請者が従前実施してきたアンケートの予備調査を行い、学習意欲と学習成果の数値化に適する質問形式や評価指標を検討する。数値化は申請者が報告した手法(論文実績)に依拠する。具体的には、(i)音韻、(ii)語彙、(iii)構文、(iv)文法、に分類し、各項目の数値化を目指す(次項図2)。入門中国語を担当する同志社大学、関西大学において、中国語初学者(合計200人)に対して、毎回学習意識調査を行い、つまずきの回数などの学習意欲の変動を追跡し、つまずきの原因になりそうな苦手分野、授業に満足/不満足な点を統計的に整理する(Outcomes)。次年度の本調査の準備をするこの作業は膨大なので、研究補助者を雇用する。

第三類:授業において満足/不満足な点を整理し、補助教材に必要な情報(テロップ)を作成する。テロップに求められるメッセージ性を次年度に検証するので、文学、文化経済、社会情勢の観点に基づくテロップを作成する(Output2の準備)。テロップ作成と映像編集作業についても研究補助者を雇用する。この作業は次年度以降も引き続き行う。

【平成29年度】

第一類:前年度のアンケート結果を踏まえ、誤用が苦手意識とどのように関連しあうかを探る。誤用例の発掘と事例研究は継続する。つまずいてからの初学者の思考プロセスが、新しい文法知識の理解の妨げになるかどうかを検討する。来年度に向けて、誤用の関連性に注目して、事例を整理する(Output1の発展)。

第二類:前年度から予備調査を経てアンケート(本調査)を実施し、学習意欲と学習成果の数値化とそのデータベース化を進める。前年度の学生に対して可能な限り追跡調査を実施し、つまずきの原因になりそうな苦手分野(文法事項)、授業に満足/不満足な点との関連性を明確にする(Outcomes)。作業実施に関しては研究補助者を雇用する。

授業で用いる教科書以外の勉強を全て「背景学習」と称し、この背景学習の有無が学習意欲にどのように影響するかを調査する。予備調査の結果を図3に示す。特に、つまずきが出始めた学生に注目し、つまずきの回数が有為に背景学習の有無に関連するかを調べる。統計学的には「回帰分析」の手法で関連性を客観的に評価する。

第三類:前年度の第二類で得られた苦手分野の知見と第二類における「背景学習」の要素を踏まえ、映像素材を収集し、テロップを作成する(Output2の発展)。後期の授業にフィードバックできるように、前期に集中的に作業を進める。

【平成30年度】

第一類：前年度までの事例研究や、つまづきの思考プロセスを踏まえて、言語学的研究成果に基づき授業での指導を目的として構成された文法を「教育文法」と称して、文法事項の再構築する作業を進める（Output1の展開）。

第二類：前年度に引き続き、学習意欲と学習成果の数値の追跡調査を行う。前年度の第三類で作成した映像教材を授業で使用し、つまづきの回数が減少するか、学習意欲が維持/改善されるか、学習成果が向上するかを調査する(Outcomes)。ここでは、映像教材を使用しない学生群(H27年度)と使用する学生群(H28,29年度)を統計的に比較する。

第三類：第二類で得られる知見から、「背景学習」に求められる要素を、文学、文化経済、社会情勢の観点から探る。この作業も主に前期に集中的に行い、後期の授業にフィードバックできるようにする。後期では教育文法の再構築作業と連携して進め、「背景学習」の必須要素の絞り込みを進め、教材の有効性を定量的に評価する。暫定的な映像教材を提案する（Output2の展開）。

<計画通りに進まなかった場合> 本計画調書作成段階での予備調査では、映像教材の効果は肯定的であった。得られたデータに基づき、学生が苦手にする分野を整理し、少なくとも事例研究の整理を進めたい。その上で、背景学習の考慮の有無や映像教材の使用の有無により、苦手分野のそれぞれの項目の理解度が改善できたかどうかを検証する。

4. 研究成果

本研究は、最終年度にあたって、いままで行っていた研究成果に基づき、教育文法の再構築を具体化し、理論文法から教育文法への転換について研究を行った。関連論文は、「理論文法から教室文法への転換 “又不” 構文を中心に」、『外国語教育フォーラム(第18号、2019年)』。また、二回生用の教材を開発した。研究期間全体を通じて、主な研究成果は、まず、学習者が学習にあたってつまづいたパターン、及びつまづいた初学者学習意欲の変動過程を解明したこと。その次、いままですべての研究成果を実践的に反映し、研究成果が現場で役に立つために新たな教科書を開発したこと。

研究期間中主に学習者の学習におけるつまづきのパターン、及び学習者の学習意識の変動に影響する要因を解明した。以上のようなことを解明したことにより、教育者が現場でそれを意識し、学習効果をもっと高めることを期待することができる。また、研究期間全体、各レベルの学習者を対象に、また、系統的に学習することを注目し、教科書10冊を開発した。(1)『ダイアローグ23プラス』(2016)(2)『入門中国語西遊記へのオマージュ(太極版)』(2016)(3)『極める中国語(改訂編)』(2017)(4)『初級中国語 会話編～自分のことばで話す中国語』(2017)(5)『初級中国語 講読編～自分のことばで表現する中国語』(2017)(6)『入門中国語西遊記へのオマージュ(乾版)』(2018)(7)『ステップバイステップ歩歩高初級中国語』(2018)(8)『例文音読でマスター!中国語文法』(2018)(9)『準中級中国語 会話編～自分のことばで話す中国語』(2019)(10)『準中級初級中国語 講読編～自分のことばで表現する中国語』(2019)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 張軼欧、「浅析从理论语法到教学语法的应用 以“又不”句式的教学为实例理論文法から教室文法への転換 “又不” 構文を中心に」、『外国語教育フォーラム』、査読有、第18号2019、pp.1~8.
- (2) 張軼欧、「動量詞“趟”的语义特征分析与教学」、『日本中国語教育学会『中国語教育』、査読有、第16号、2018、pp.111~124.
- (3) 張軼欧、町田茂、稲垣智恵、紅粉芳恵、氷野善寛、「要点式学校文法の再検討」、『日本中国語教育学会『中国語教育』、査読有、第16号、2018年、pp.47~67.
- (4) 張軼欧、「汉语重修班学习者的学习积极性调查及课堂设计」、『関西大学外国語機構『外国語教育フォーラム』、査読有、第16号、2017、pp.1~23.

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 張軼欧、「要点式学校文法の再検討」、『第15回日本中国語教育学会、2017
- (2) 張軼欧、「关于“再”的间接否定定义分析」、『世界漢語教育史学会、2016
- (3) 張軼欧、「On the semantic characteristics of verbal measure word “tang”」、『Seventh Italian-Japanese Chinese Researchers Seminar on Language and Cultural Relations、2016

〔図書〕(計10件)

- (1) 張軼欧、奥村佳代子、塩山正純、金星堂『準中級中国語 会話編 ~自分のことばで

- 話す中国語～』、2019、80
- (2) 張軼欧、奥村佳代子、塩山正純、金星堂 『準中級中国語 講読編 ～自分のことばで表現する中国語～』、2019、80
 - (3) 張軼欧、紅粉芳恵、氷野善寛、阿部慎太郎、板垣友子、駿河台出版社、『例文音読でマスター！中国語文法』、2018、223
 - (4) 張軼欧、朝日出版 『ステップバイステップ步步高初級中国語』、2018、137
 - (5) 張軼欧、副島一郎、『入門中国語西遊記へのオマージュ(乾版)』、朝日出版、2018、117
 - (6) 張軼欧、奥村佳代子、塩山正純、金星堂 『初級中国語講読編 ～自分のことばで表現する中国語～』2017、78
 - (7) 張軼欧、奥村佳代子、塩山正純、金星堂 『初級中国語 会話編 ～自分のことばで話す中国語～』、2017、78
 - (8) 張軼欧、内田慶市、同学社出版 『極める中国語(改訂編)』、2017、109
 - (9) 張軼欧、向正樹、副島一郎、朝日出版、『入門中国語西遊記へのオマージュ(太極版)』、2016、129
 - (10) 張軼欧、内田慶市、張小鋼、好文出版、『ダイアローグ 23 プラス』、2016、72.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。